

武蔵浦和駅周辺地区義務教育学校開校準備委員会本部会の概要

回数（作成課）	第3回本部会（武蔵浦和駅周辺地区義務教育学校開校準備室）
日時	令和7年4月23日（水） 17時30分～19時45分
場所	さいたま市立沼影小学校 プレハブ1階多目的室
出席者	内谷中学校長、浦和別所小学校長、西浦和小学校長、辻小学校長 沼影小学校長、浦和大里小学校長 家庭からの参加者3名 地域からの参加者4名 日本体育大学教授（学識経験者） 教育長、副教育長、理事兼管理部長、生涯学習部長、管理部参事、学校教育部次長 武蔵浦和駅周辺地区義務教育学校開校準備室長、学事課長
議事	1 本部会・ワーキンググループの令和7年度以降の活動見通しについて 2 各ワーキンググループからの活動報告について （1）校名・移行イベントより（校名公募について） （2）通学区域より（通学区域等について） 3 「未来の姿」についてのアンケート調査結果について 4 その他

○教育長挨拶

令和7年度より、開校準備等を引き続き着実に進めていくため、武蔵浦和駅周辺地区義務教育学校開校準備室を設置した。令和10年度の開校に向けて、学校、家庭、地域と行政で意見交換を行い、より良い学校をつくっていききたいとの思いを伝えた。

1 本部会・ワーキンググループの令和7年度以降の活動見通しについて

（武蔵浦和駅周辺地区義務教育学校開校準備室長からの説明）

本部会活動実績と今後の予定について説明した。また、各ワーキンググループの進捗状況や今後の見通し、意見交換の様子について説明した。

2 各ワーキンググループからの活動報告について

（1）校名・移行イベントワーキンググループより

（武蔵浦和駅周辺地区義務教育学校開校準備室長からの説明）

校名・移行イベントワーキンググループのこれまでの4回の活動報告、及び校名アイデアの募集を5月から実施することについて説明した。

（2）通学区域ワーキンググループより

（学事課長からの説明）

通学区域ワーキンググループの活動報告、及び現時点での通学区域（案）を提示し、意見を求めた。

（参加者からの主な質問・意見）

○令和8年2月に市議会へ提出予定の学校設置条例の一部改正の議案には何を諮るのか。カリキュラム等もその時点で決定されるのか。

→武蔵浦和駅周辺地区義務教育学校開校準備室からの回答

学校設置条例は、学校名とその位置を定めるものである。通学区域については、別途規則で定めることにしている。当該条例によって、カリキュラム等も決定するということではない。

○通学区域について、C 1・C 2から、通学路・通学区域に関する意見要望は出ているか。

→学事課からの回答

第2回のワーキンググループではC 1・C 2についての意見等はなかった。これまでワーキンググループ内で意見・要望等がなかったため、特別の意見交換は行っていない。

○C 1・C 2・E 1・E 2について、ワーキンググループ内で再度検討をすることはできないのか。

また、新しい通学区域地図だけでなく、現在の通学区域地図も資料の中にあると比較しやすいため、今後そのようにしてはどうか。

→学事課からの回答

ワーキンググループの枠組みの中で、通学区域については今後も保護者や地域の方々の声を聴きながら検討していきたい。新・旧の通学区域の示し方については、次回のワーキンググループまでに改善していく。

3 「未来の姿」についてのアンケート調査結果について

(武蔵浦和駅周辺地区義務教育学校開校準備室長から説明)

- ・事務局で行った「未来の姿」アンケート結果の分析、及び今後のスケジュールと活用方法
- ・グループ内協議での意見交換の方法

(A、B、Cの3グループに分かれて協議)

(辻小学校長、沼影小学校長から以下の内容でAグループの協議内容を発表)

【子ども（児童生徒）が学ぶ場として】

○浦和大里校舎、内谷校舎では4年生が最上級生となることで、たくましく成長していくことを期待している。同様に沼影新設校舎の5、6年生にとっては7～9年生が憧れの存在となり、その姿を見て成長していくと思う。

○開校するまでに、小学校から中学校へと段階的に学びを深める一貫した教育カリキュラムを十分に整え、効果的なカリキュラムで臨めるよう準備したい。

【子ども（児童生徒）が学校生活を営む場として】

○大規模になり人数が多いことを心配する子どもたちもいるが、その大人数での交流が成長のきっかけになりうる。

○クラブや部活の運営についても今からしっかり考えていかなければならない。

○目指す姿のキーワードとして、「希望」が含まれると良い。

【地域の核（拠点）として】

○これまでも、今も、地域の方々との交流の中で地域への愛着や親しみをもって子どもたちが成長している。「未来の姿」においても地域と子どもとの交流が重要なキーワードになると思う。

○安全・安心な学校、地域の拠点としての安全確保が重要である。

○本義務教育学校を地域の核としたいという地域の願いと、子どもたちの思いの双方どちらも大切にしていく。

【教職員の役割と働く場として】

- 小学校と中学校の先生と一緒に生活することで、新たな連携、更なる進化が生まれることを期待する。
- 沼影小学校では、小・中一貫教育について研究をしている。今後カリキュラムを具体化し、開校時には確立された形を示すことを目標としている。また、来年度には、小・中一貫教育の研究発表を行う予定である。

(内谷中学校長から以下の内容でBグループの協議内容を発表)

【子ども（児童生徒）が学ぶ場として】

- 9年間を通したカリキュラムを考えていく中で、それぞれの学校の持つ強みを継承していきたい。

【子ども（児童生徒）が学校生活を営む場として】

- 大きな行事の際だけでなく、日常的な異学年交流を促進し、その中で多様性も取り入れていくことも大切である。
- 大規模な活動を通じて、新たな繋がり方を構築していきたい。

【地域の核（拠点）として】

- 「未来の姿」の目指すべき目標とそれを達成するための手段を整理し、推進していく。
- 本義務教育学校が地域の中心、南区の顔となるような学校を目指していく。
- 地域の大人が、子どもたちの教育活動に関わっていくことで学校が大人も学べる地域全体の学びの場となっていく。

【教職員の役割と働く場として】

- 多くの教職員が小・中一貫教育の中で関わり合い、教職員としての資質を磨いていく場となればよい。
- 大規模な学校ならではの新たな枠組み、縦の繋がり、横の繋がりを楽しむ教職員集団をつくることにより、子どもたちにも良い影響があると思う。

(浦和別所小学校長から以下の内容でCグループの協議内容を発表)

【子ども（児童生徒）が学ぶ場として】

- 人数が多いことで、様々なクラブ活動が可能になり、地域や保護者の力を取り入れた活動ができると考えられる。
- 異年齢交流ということで、1年生から9年生までの交流をうまく工夫することで、校舎の垣根を越えた幅広いレベルの交流が可能になる。

【子ども（児童生徒）が学校生活を営む場として】

- 大規模な学校、多くの子どもたちが集まることを学校の強みとして生かしていく。
- 多様な考えや様々な価値観が集まることを学校生活に生かしていく。

【地域の核（拠点）として】

- 地域の教育力を学校に取り入れることは「地域とともにある学校づくり」に生かされると思う。地域の多様性や教育資源を生かし、子どもたちにとって、また大人にとってもやりがいや生きがいを学ぶ場としての役割が期待できると思う。
- 保護者同士の価値観の共有や交流を促進する場としての学校の役割も期待したい。
- 多様性を尊重し、多様な人材をうまく活用することが重要である。

【教職員の役割と働く場として】

○地域、保護者を取り入れた活動が充実することで、教職員にも地域に支えられているという心の余裕が生まれ、より子どもに寄り添うことができる。

(A～Cグループの発表を受けて、参加者より質問など)

○地域から学ぶことの重要性が、学校の未来の姿を作り上げていく中で議論されている。

○児童生徒数が多い学校の特色の強みと弱みをよく議論する必要がある。

○具体的な現実を踏まえた地域とのコミュニケーションが重要である。様々な人がいる中で、どのように学校と地域が関わるのか、開校準備委員会の中で具体的に検討し、地域の中で学校と関わろうとする人の参画を促していくことが重要だと思う。

○地域やボランティアの参加を促すのは難しいという話も耳にするが、浦和大里小では PTA が活動をボランティア制に移行、学校もボランティア組織を立ち上げ保護者の参加は総勢 190 名となった。今後、浦和大里小 PTA では参加しやすい仕組みを作っていくため、この仕組みを続けていきたい。

○学校は地域を頼りにしており、ボランティア活動を通じて多くの保護者が教育活動に関わっていることに感謝している。今後も手を取り合って地域と一体となり学校運営を推進していきたい。

(学識経験者からのコメント)

今回の「未来の姿」についての意見交換の中では、学校に普遍的に求められる姿と、本義務教育学校ならではの姿の二つの「未来の姿」が意見として出てきた。関係校に元々あるもので受け継いでいくものは何か、新たに義務教育学校でやりたいものは何かについて考える機会になったのではないかと。また、安全・安心に関する話題もでたが、「未来の姿」を考えることは、学校の存在意義を問い直すことにもかかわる。

東日本大震災後、早期に学校の再開を決断した自治体があり、後にその理由を伺ったところ、学校が地域の日常を取り戻すための重要な役割を果たすと考えての判断であったとのことだった。実際に学校が再開し、子どもたちが学校に通う姿が戻ってくことで日常が取り戻されたという。「地域の核（拠点）として」考えていくのはこういうことではないか。

本部会とワーキンググループの議論とがつながりがあり、より良い意見交換がなされ、新たなアイデアが生まれていく可能性を感じている。また、「未来の姿」について学校が「地域の核」となるという視点が示されている。本開校準備委員会の規模はまれにみる大きなもので、このような委員会を設けて丁寧に議論を重ねていること自体がとても価値あることである。

今後も力を合わせてより良い学校づくりのための意見交換が行われることを期待したい。

4 その他

連絡事項特になし